親鸞

第一卷

吉川英治

光風社版

鸞親

第一巻

昭和三十二年十二月十五日　初版発行
昭和三十二年十二月廿七日　再版発行

定価　二五〇円

著者　吉川英治
発行者　豊島清史
印刷者　菅生定祥

発行所　株式会社　光風社
東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話　東京(29)〇二三八番
振替口座東京　五六五二六番

乱丁落丁は御取替いたします

亂國篇
第一の聲　九
啞の世　四一
紅玉篇
かげろふ記　八三
北面亂星　一二
炎の辻　一五三
貧乏ぐるま　一六七
燎原の火　一七六
花は夜風に乘つて　一九八

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

登岳篇

くろがみ　二二五
雪千丈　二三五
大衆　二四七
鳴らぬ鐘　二七三
黒白　二九三

去來篇

大和路へ　三一九
川霧　三四〇

裝幀

關野準一郎

親鸞

第一卷

亂國篇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

第一の聲

一

朱雀の辻に、鈴を鳴らして、今朝から、喚いてゐる男があつた。

蜂にでも螫されたのか、陽に焦けた額が、腐つた柘榴みたいに凸凹に歪んでゐる。大きな鼻と、强情らしい唇を持ち、栗のイガみたいに、蓬々と伸びた坊主頭には、白い埃がたかつてゐた。

年ごろは、そんな風なので、見當がつかない。三十とも見えるし、四十かとも思はれる。身は、やぶれ衣に、繩の帶一つ。そして、沓よりは丈夫らしい素裸足で、ぬつと、大地から生えてゐるといふ容である。

りいん！　りいん！

振り鳴らす鈴の音も、凡な力ではないのだつた。

群衆は、取りまいて、

『何ぢや？』

『どこの山法師かよ』

と囁き合つた。

殘暑の往來を、牛車が、埃をたてゝ軋る。貴人の輿が通つて行く。

又、清盛入道の飛耳張目――六波羅童と呼んで市人に恐れられてゐる赤い直垂を着た十四、五歳の少年等が、何か、平相國の惡口でも演じてゐるのではないかと、こましやくれた眼を、きよろ〳〵させ、手に鞭を持つて、群の蔭からのぞいてゐる。

だが、男は、憚らない大聲で、自分のシヤ嗄れ聲に熱し切ると、我れを忘れたやうに、右手の鈴を、宙にあげて、

『清聽つ、清聽つ――』

と呶鳴つた。

『――沙彌文覺、敬つて、路傍の大衆に申す。それ、今世の相を見るに、雲上の月は、絶えまなく政權の爭奪と、逸樂の妖雲に戲むれ下天の草々は、野望の武士の弓矢をつゝむ。法城は呪詛の炎に燒かれざるはなく、百姓、商人、工匠たちの凡下は、住むべき家にも惑ひ、飢寒に泣く。――まづ、さうした世の中ぢや。――さうした世に生きる人間どもは、必然、功利に溺れ、猜疑深く、骨肉相食み、自己を省みず、利を獲れば身をほろぼし、貧に落つれば、人のみを呪ふ。富者も餓鬼！　貧者も餓鬼！　そして、滔々と、この人の世を濁流にする――』

額に汗をして、そこまで、一息に云つた。そして、

りいん！

と更に、鈴を振りかけると、

『乞食法師、待てつ』
誰か、呶鳴つた。
赤い直垂が、人垣を掻きわけて、前へ出て來た。
（六波羅小僧）
人々は、眼と眼で、さゝやき合つた。不安な顏をして、法師の鈴と、少年の鞭とを、見較べた。
法師は、傲然と、
『何かつ』
と、云つた。
平家の廳の威光をかさに着て、いかにも、小生意氣らしい町隱密の少年は、鞭で、大地をたゝきながら、
『おのれは今、――富者も餓鬼、貧者も餓鬼、――そして、雲上は政權の爭奪と、逸樂の妖雲に蔽はれてゐると』
『はゝゝ……人の話は、仕舞ひまで聞け、それは、昨日の源氏の世を云うたのだ。……これから、今日のことを云ふ。だまつて、そこにゐて、聞いて居れ！』
鈴を、懷中に入れて、その懷中から、文覺は、何やら、紙屋紙に書いた一通の反古を取り出した。

二

『これは、勸進の狀』

文覺は、群衆へ云つて、それから、おもむろに書付をひろげだした。

眼の隅から、刎き飛ばされたやうに、六波羅童は、手もちぶたさに、人混みの中へ、引つこんで了ふ。

（ざまを見ろ）

と云ふやうに、人々は、赤い直垂の尻を、眼で嗤つた。

文覺は、勸進の文をひろげ、胸をのばして、さて又、大聲を揚げ直した。

『――今、云つたは、昨日の事。さても明日の世は又、冥々としてわからない。今日が、平和と云うたとて、生死流轉、三界苦海、色に、酒に、金に、跳猿の迷ひから醒めぬものは、やがて、思ひ知る時があらうといふもの。白拍子の、祇王ですらも歌うたではないか――

萠え出るも
枯るゝも同じ
野邊の草
いづれか
秋にあはで果つべき

心し給へ、大衆。いづれか秋にあはで果つべきぢや。こゝに、不肖文覺、いさゝか思ひをいたし、かくは路傍に立つて、われ等の同血に告ぐる所以。ねがはくは、貴賤道俗の助成によつて、高雄山の

靈地に、一院を建立し二世安樂の勤行を成就させ給へ』
と、眸をあげた。
燃えるやうな眸である。人間同志の今の不安を見過し得ない憂世の血が、その底を流れてゐる。
咳一咳して、
『依而、勸進の狀』
と、手に披げてゐた文を高々と讀みはじめた。」

それ惟みれば
眞如廣大なり
法性隨妄の雲
あつく覆つて
十二因緣の峯に靉きしより
この以降
本有心蓮の月のひかり
幽かにして
まだ、三毒四慢の太虛に
あらはれず
悲しいかな

佛日はやく沒して
生死流轉の巷冥々たり
たゞ色に耽り、酒にふける
いたづらに人を誘し
また世を毒す
豈、閻羅獄卒の責を免れむや、
こゝに稀々、文覺
俗を拂ひ法衣を飾ると雖も
惡行なほ心に蔓り
善苗、耳に逆ふ
いたましいかな
再び三途の火坑に囘り
四生の苦輪を廻らむ事を
故に、我
無常の觀門に涙し
上下の眞俗をすゝめて
菩提の悲願に結緣の爲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com